

二次元可能世界意味論の展開（３）

——認識的二次元主義に対する批判的応答——*

藤川 直也

本稿では、認識的二次元主義に対する批判的応答を、スタルネイカーとソームズの見解を中心に紹介する。１節では、二次元的枠組みの認識的解釈が抱える問題の指摘として、認識的二次元主義をある種の記述説と結び付けるスタルネイカーの反論と、認識的二次元主義に対する命題的態度の観点からのソームズの批判を取り上げる。２節では、この種の反論に加えて、認識的二次元主義の哲学的目的に対する批判的応答、すなわち、アプリアリ性と必然性の再接続に対する批判を見る。３節では、これらの批判を踏まえて、認識的二次元主義とその批判との対立の根底には、言語／思想は現実世界と独立でありうるのかという問題がある、ということを確認したい。

１．二次元的枠組みの認識的解釈が抱える問題

１.１ 認識的二次元主義と記述説（スタルネイカー）

認識的二次元主義に対する一つの典型的な応答として、それがどれほど洗練されていようと、結局はいわゆる記述説——単称指示表現にはその指示を決定する記述的意味が結び付いており、それはその表現の意味論的内容を構成するという見解——の復活に他ならないのではないかと、というものがある。シナリオや判読可能性といった認識的概念による洗練された認識的内包の定式化にもかかわらず、チャルマーズが具体例を用いて認識的内包を説明するときには、彼の念頭に記述說的描象があることが強く示唆される⁽¹⁾。それゆえ、認識的二次元主義に対する反論に、認識的内包とは結局固有名に結び付けられた記述的内容に他ならず、認識的二次元主義には記述説に対するクリプキの反例がそのまま当てはまる、というものがあるのももっともなことである。このような批判を展開するのは、バーンとプライアー(Byrne & Pryor, 2006)だ。認識的二次元主義によれば、発話ないし思想と二次内包との結び付きを決定するのは、あるシナリオを現実として与えられたときの主体のアプリアリな推論能力、すなわち判読可能性である（認識的内包は、この推論能力を表す）。彼らによれば、認識的二次元主義のこのような特徴は、結局、固有名や自然種名の話し手に、その指示対象を一意的に同定するに十分なその対象についての記述的知識を要求するに等しい。しかし、

固有名や自然種名の話し手がそのような知識をもっていないということは、クリプキ (Kripke, 1980) が、かの有名なキケロ / タリーの事例や、ゲーデル / シュミットの事例で示したことに他ならない。よって、認識的二次元主義は誤りである。

この種の反論に対してチャルマーズ (Chalmers, 2006a, Sec. 5) は、認識的内包は必ずしも記述によって明示化される知識である必要はない、と応じる。認識的二次元主義によれば、認識的内包とは、あるシナリオを現実として与えられれば、様々な表現についてのその指示を決定できるという主体の条件的能力に過ぎないからだ。

このようなチャルマーズの再反論が正しければ、認識的二次元主義は、個々の名前や自然種名のそれぞれに特定の一群の記述が結び付いていると考える単純な記述説とは区別されるべきであろう。しかしスタルネイカー (Stalnaker, 2003, 2004) は、認識的二次元主義が志向性に関する内在主義的理論に依拠しているということに基づいて、それがより徹底した記述説的見解を含意すると指摘する。

繰り返しになるが、認識的二次元主義によれば、表現の指示決定者としての一次内包は、主体の概念的能力によって説明される。つまり、文の真偽や語の指示といった外延の決定は、主体の内的状態に依存するとされる。これが意味するのは、認識的二次元主義は、内在主義的な志向性の理論——志向性を主体の内的性質・状態によって説明する理論——にコミットしているということである。さらに、すでに見たように、認識的二次元主義は、あらゆる表現に認識的内包を認める。それゆえ、認識的二次元主義が与える志向性の説明は、局所的に内在主義的なもの、つまり、発話や思想のある特定的一部分——例えば固有名や自然種名の発話やそれによって表現される概念——に限って内在主義的説明を与えるというようなものではない。それはあらゆる表現や思想の志向性を内在主義的に説明しなければならないだろう。スタルネイカーによれば、そのような説明の（現在利用可能なおそらく唯一の）候補は、デイヴィッド・ルイス (Lewis, 1984) の「包括的記述説 (global descriptivism)」である。包括的記述説によれば、ある言語に含まれるあらゆる語彙（論理的語彙は除く）に一度に与えられる解釈とは、その言語で表現されるあらゆる信念（ないし理論）を、可能な限り多く真にするような、単称名への対象の、述語への性質ないし関係の割り当てに他ならない⁽²⁾⁽³⁾。

以上を踏まえた上で、スタルネイカーは認識的二次元主義を次のように批判する。このように認識的二次元主義は包括的記述説にコミットするが、包括的記述説は問題含みであるために、認識的二次元主義も困難を抱えてしまう。スタルネイカー (Stalnaker, 2004, 2004a) の考えでは、この包括的記述説は、少なくとも「全体論の問題」と「間接

性の問題」という二つの問題を抱えている。前者は次のような問題である。包括的記述説によれば、我々のどんな発話や思考の内容の決定にも常に理論全体が関わる。したがって、理論を構成する個々の主張におけるどんな些細な変化も、その理論によって解釈を与えられる言語に属するあらゆる表現の内容を変化させる。このことは延いては、ある人の理論と別の人の理論は、両者の主張の中に一つでも違いがあれば、言語の内容はすべて異なるということの意味する。同じことは、異なる時点における同一人物に関しても生じうる。それゆえ、包括的記述説によって与えられる言語の解釈は極めて不安定で、特異的なものになってしまう。しかしこれはかなり受け入れ難い帰結であろう。間接性の問題は次のような問題である。包括的記述説によれば、我々のどんな発話や思想の内容も、個別的な対象や性質を直接含まない。そうではなくて、それは、「自身の包括的理論をもっともよく真にするような何らかの対象および性質なしいし関係」、といった極めて抽象的な内容である(註2を参照)。世界に存在する個々の対象や性質への我々の認知的なアクセスは、せいぜいこの抽象的な内容を介した間接的なものに過ぎない。エヴァンズの「ユリウス」(論文(1)を参照)がこの間接性の例を与える。「ユリウス」を含む文を理解する人には、ユリウスが誰なのかを知らないものがある(エヴァンズ自身もおそらくその一人だろう)。するとその話し手は、その文が表現する単称命題を知らない。その文が真だと彼が言うときにその人が信じているのは、関連する固定化記述が決定する単称命題が何であれそれは真だという命題に過ぎない。確かにこれらのことは「ユリウス」という語を用いる人のうちのあるものについては成り立つだろう。しかし、あらゆる表現がこの種の抽象的で間接的な内容をもつ——我々はいかなる場合でも自分がどんな対象や性質について語っているのかを知らない——ということは極めてもっともらしくない。

認識的二次元主義は、それがコミットする内在主義的理論が抱えるこのような困難を引き継ぐだろう、というのがスタルネイカーの考えである。これに対してチャルマーズ(Chalmers, 2006a, sec. 5)は、包括的記述説以外の内在主義的な志向性の理論の可能性が残されており、それゆえ、認識的二次元主義は必ずしも包括的記述説に与しない、と応答している。だがもしそうだとすると、認識的解釈には、内在主義的な志向性の理論のオルタナティブを発展させるという大きな課題が残ることになる。また、いずれにせよ認識的二次元主義は内在主義を採ることになるのならば、我々にとって、それを外在主義的な志向性理論を採る立場と対比させることが興味深い検討課題になるだろう。後者の点については、2.2節で触れることにしたい。

1.2 認識的二次元主義と命題的態度（ソームズ）

認識的二次元主義に対する応答を見る上で外すことができない論者の一人として、認識的二次元主義（のみならず、後に見るように、アポステリオリな必然性／アプリオリな偶然性に対する二次元的説明一般）に対する徹底した批判者であるソームズを挙げることができる。ここでは、ソームズ(Soames, 2005, 2006)が展開する批判の中から、命題的態度にまつわる認識的二次元主義の問題を紹介しよう。論文(2)で確認されたように、認識的二次元主義によれば、ある言明 S がアプリオリ／アポステリオリに知られるということは、一次内包の必然性／偶然性によっていたのであった。ソームズによればこれが意味するのは、主体の知識、より一般的に命題的態度の対象は、二次内包ではなく一次内包だ、ということである。つまり認識的二次元主義は、ある文 S が認識オペレータと結び付くことでできる複合文（命題的態度報告文）の真理値決定に寄与するのは、 S の一次内包であるという考えにコミットしている。他方、形而上学的必然性は、認識的二次元主義においても、二次内包の必然性によって説明される。したがって、 S が様相オペレータに組み込まれた場合、その様相文の真理値決定に寄与するのは二次内包である。結局のところ、認識的二次元主義は、様相オペレータと認識オペレータが、それぞれ二次内包と一次内包という異なるものに作用すると考えるのだ。

ソームズによれば、認識的二次元主義は、この特徴ゆえに様相オペレータと認識オペレータが複合的に現れる文に対する真理条件の割り当てに関して問題を生じる。彼はこのことを示す事例をいくつか挙げているが、そのうちの一つは次のようなものだ(Soames, 2005, pp. 272-273, 2006, pp. 286-287)。二次元主義によれば、「ステファニー・ルイスの夫は『反事実的条件法』の著者であった」と「ステファニー・ルイスの現実の夫は『反事実的条件法』の現実の著者であった」の一次内包は同一である（「...であるようなもの」という表現と「現実に...であるようなもの」という表現は、現実と考えられたそのシナリオにおいてはいずれも当該の記述「...」を満たすものを選び出すはずなので）。したがって、「メアリーはステファニー・ルイスの夫は『反事実的条件法』の著者であったと信じている」と、「メアリーはステファニー・ルイスの現実の夫は『反事実的条件法』の現実の著者であったと信じている」は同値である。すると、 $[]$ は様相オペレータのスコープを表すとして、

$[\text{もしステファニー・ルイスの現実の夫は『反事実的条件法』の現実の著者であったのであり、かつ、メアリーはステファニー・ルイスの現実の夫は『反事実的条件法』の現$

実の著者であったと信じているならば、メアリーは真なる何ごとかを信じている」は必然的に真である

と

「もしステファニー・ルイスの現実の夫は『反事実的条件法』の現実の著者であったのであり、かつ、メアリーはステファニー・ルイスの夫は『反事実的条件法』の著者であったと信じているならば、メアリーは真なる何ごとかを信じている」は必然的に真である

の真理値は等しいはずだ。ここで、後者は偽である⁽⁴⁾。すると、認識的二次元主義に従えば二つの文は同値であるはずなので、前者も偽のはずだ。しかし、前者は明らかに真である。よって二次元主義はこの種の信念帰属を適切に扱えてはいない。

このようにソームズは、様相・認識複合文の意味論の観点から認識的二次元主義を批判する。この問題が生じるのは、認識的二次元主義においては、認識オペレータと様相オペレータがそれぞれ、それらが結び付く文の一次内包と二次内包という別々の対応物をもつとされるからである。

この反論に対してチャルマーズ(Chalmers, 2002a, sec. 8, 2006, pp. 106-107, 2006, sec. 5)は、認識的二次元主義のもとでも、二次内包を考慮に入れるようなより洗練された信念帰属理論が構築可能であり、そのような理論においては、ソームズが指摘するような困難は生じないと論じる⁽⁵⁾。しかしこのような応答にソームズは満足しないだろう。というのも、ソームズは、はっきりと区別されるような二つの内包としての一次内包と二次内包という考えに、そもそも懐疑的であるからだ。続く 2.1 節でこの論点を見ることにしたい。

2. アプリオリ性と必然性の再接続に対する批判

ここまでで見たのは、二次元的枠組みの認識的解釈そのものに向けられた批判である。ここからは、認識的二次元主義が、認識的解釈を用いて達成しようとする哲学的目的、すなわち、アプリオリ性と必然性の再接続という目的に関する批判的応答を見ていきたい。

2.1 形而上学的可能性 / 認識的可能性の区別と、アポステリオリな必然性の一次元的説明 (ソームズ)

ソームズは、2 節で見た類いの問題は認識的二次元主義の抱える決定的な困難であるとする。ここから彼はさらに、アポステリオリな必然性 / アプリオリな偶然性の事例に対する二次元的な説明をいっさい放棄すべきだと主張する。それではソームズはこれらの事例をどのように説明するのだろうか。この点をアポステリオリな必然性に焦点をあわせながら確認していこう。その結果我々は、ソームズがアプリオリ性と必然性の再接続に対して下す否定的な判断を見ることになる。

ソームズの考えはこうだ。認識的可能性——矛盾なく考えうる世界の可能なあり方——はすべて、形而上学的可能性——世界が実際にそう

でありうる仕方——である、ということを否定しよう。

つまり認識的可能性と形而上学的可能性を区別しよう。

するとこの場合、アポステリオリにのみ知られうる必然的命題は、あらゆる形而上学的可能性において真であるが、少なくとも一つの形而上学的に不可能な認識的可能性において偽になるような単一の命題として説明される。

例えば、「水はH₂Oである」は表 4 のような真理値

<i>m.p.1</i>	<i>m.p.2</i>	<i>e.p.1</i>
T	T	F

m.p.1 は現実世界

m.p.2 は水がオレンジ色であるような形而上学的可能性

e.p.1 は水がXYZであるような形而上学的に不可能な認識的可能性

表4

をもつ命題を表現する。このように、形而上学的可能性と認識的可能性を区別すれば、単一の命題が必然的かつアポステリオリにのみ知られうるということを問題なく考えることができる。つまり、アポステリオリな必然性の事例を説明するためには、一次元の意味論で十分なのである。そしてまた、このことが意味しているのは、アポステリオリであると同時に必然的な命題が存在するということに他ならない。それゆえ、チャルマーズらの哲学的目論見であった、アプリオリ性と必然性の再接続を果たすことはできないのである。

ソームズは形而上学的可能性と認識的可能性の区別こそがクリプキの真の洞察であるとする。そのような区別がなされるべき理由を理解するには、可能世界に関するクリプキの考え方と彼の本質主義を見るのが助けになる。クリプキの考えによれば、可能世界は我々の世界と独立に存在する具体的な存在者ではない。そうではなくて、可能世界は、現実世界における対象と性質についての我々の知識に基づいて構成される抽象的な存在者である。例えば我々は水が無色透明で、オレンジジュースがオレンジ色だということを知っている。この知識をもとに我々は、水がオレンジ色でオレンジジュースは無色透明であったかもしれないと考えることができる。可能世界をこのようなものと見なすとき、現実世界における対象と性質に関する我々の無知に起因して、形而上学的可能性と認識的可能性の区別、特に形而上学的には不可能な認識的可

能性が現われる。対象の本質的性質に関して無知であるなら、我々は、その対象が、その本質的性質に相反するような性質をもつということを、矛盾なく考えることができる。水の化学組成を例にとろう。もし水が H_2O であるということを知らないならば、それがXYZであるということを矛盾なく考えることができる。しかし、水が H_2O であるということは水にとって本質的であり、それゆえ、実際に水がXYZであることは実際にはありえない。したがって、水がXYZであるというのは形而上学的に不可能な認識的可能性である。

2.2 メタ意味論的解釈と外在主義 (スタルネイカー)

論文(1)の2節や論文(2)の4節で触れられたように、スタルネイカーもまた、アプリアリ性と一次内包の必然性を同一視することはできないと考える。スタルネイカーは自身の二次元的枠組みの解釈を、メタ意味論的解釈と位置付ける。彼が二次元的枠組みに与える解釈によれば、二次元的内包は、表現の意味そのものを表すのではない。そうではなくて、意味論的事実——ある特定の発話が当の意味論的内容をもつ——ということを成立させる、世界における一定の事実——の変化に応じて表現がその意味をどのように変化させていくのか、というメタ意味論的事象を表すのである。そしてこのような「メタ意味論的説明においては、アプリアリに知りうる真理の典型例(例えば単純な数学的真理)でさえ、ある文脈では偶然的な

対角線命題をもつ(Stalnaker, 2004, p. 302)」のである。例えば「 $7+5=12$ 」のある発話を考えよう(ibid, p. 303)。さらに、この発話の聞き手は、この発話の意味論的事実を確定しかねているとしよう。例えば、その聞き手は、この発話が10進法に基づいているのか、8進法に基づいているのかを迷っているとしよう。この場合、この聞き手の信念と両立可能なある文脈においては、その発話は七たす五は十という必然的に偽なる命題を表現することになる。するとこの発話に割り当てられる対角線命題は偶然的であることになる(表5を参照)。

	w	w'
w	T	T
w'	F	F

wは10進法の世界

w'は8進法の世界

表5

このように、メタ意味論的解釈によれば、アプリアリな真理を表現する文の発話は必ずしも必然的な対角線命題をもつわけではない。それゆえ、チャルマーズらの認識的解釈が目論むように、一次内包の必然性によってアプリアリ性を全面的・包括的に説明するということは、メタ意味論的解釈では、不可能である。(このことは、対角線命題の必然性とアプリアリ性が一致するような局所的文脈があるということまで否

定しない。Stalnaker, 2004, p. 303, n. 12 を参照。)

このように二次元的枠組みをメタ意味論的に解釈する限り、チャルマーズのいう「中核をなすテーゼ」は擁護できない。だがこのことは、チャルマーズの側からすれば、「中核をなすテーゼ」を擁護するにメタ意味論的解釈では不十分だ、ということに他ならない(論文(2)の4節を参照)。では、このようなメタ意味論的解釈を動機付けるものは何だろうか？すでに見たようにスタルネイカーの考えでは、認識的二次元主義は、志向性に関する内在主義を動機付けにもっており、それゆえ認識的解釈は包括的記述説が抱える問題点をそのまま引き継がざるを得ない。これに対して、スタルネイカーは、自身のメタ意味論的解釈を動機付けるのは、志向性に関する外在主義的理論だと言う。彼が念頭においているのは、因果的・情報論的な内容決定理論だ。「アリストテレス」を含む文によって表現されるような思考を考えよう。この思考がアリストテレスについてのものであるのは、主体が思考をもつという事実に対して与えられる因果的説明においてアリストテレスが果たす一定の役割のおかげである。発話についても、思考についてのこの外在主義的によって、外在主義的な説明が与えられるだろう。このような内容決定理論によれば、発話や思想の内容を決定するのは、主体と世界がどのような仕方に関係しているのかに関する事実であって、主体の内的性質——主体の「頭の中」で起こっていること——ではない。この意味で、この理論は外在主義的な志向性の理論である。そしてこの外在主義的理論を採用したとき、我々は一次元の世界を、内容を決定する主体と世界の間を特定するものと見なすことで、内容がこれらの事実に応じて決定される仕方を、二次元的内包を用いて説明できる。つまり二次元的内包はメタ意味論的事象を表すのである。

3. 言語 / 思考は現実世界のあり方から独立か？

さて、スタルネイカーは、外在主義の採用、そして、1節で見た包括的記述説の失敗が意味するのは、「内的に基礎付けられた意味論をもつ中立的言語、その解釈のために事実に関するいかなる想定も必要とせず、世界とすべての可能世界についての完全な記述を与えうるような言語(Stalnaker, 2004, p. 308)」を我々はもっていない、ということだと考える。スタルネイカーによれば、「我々が世界を記述する唯一の仕方は、現実世界が我々に提供する材料——我々がそこで見いだす、もの、性質、関係——を使うものである(Stalnaker, 2004, p. 308)。」つまり、我々が世界の記述に用いる言語や思考の内容は、現実世界がどのようなものであるかに否応無しに影響されているのである。ソームズもまた、形而上学的に不可能な認識的可能性を説明する際に、可能世界の記述が、

我々の世界の中にあるものや性質、関係に依存しているということを重要な論拠として挙げていた。つまり彼らは、言語や思考といった概念的なものを、現実世界がどのようなものであるのかと完全に切り離すことはできない、と考えている。ここで、認識的二次元主義は、シナリオを構成するために意味論的に中立的な記述を要求するということを思い出そう。意味論的に中立的な記述とは、「反事実的な世界での外延が、現実世界がどのようなであると判明するかに依存しない表現(Chalmers, 2004, p. 192)」である。つまり、現実世界のいかに関わらず、常に同じこと——具体的に言えば同じ二次内包——を意味するような表現である。一次内包の必然性をアプリアリ性と同一視するには、世界が実際にどのようなであるかとは独立に世界のあり方を表す表現が必要なのだ。ソームズとスタルネイカーが認識的二次元主義に反対する基礎は、まさにこのような記述があり得ない点にあると言える。

4. まとめ

論文(1)、論文(2)の議論を含めて、二次元様相意味論の発展をおさらいしておこう。70-80年代にかけて発展した初期の二次元意味論は、クリプキの固定指示子というアイデアを維持しつつ、それが引き起こすとされるアポステリオリな必然性/アプリアリな偶然性の事例を説明する試みであった。カプラン、スタルネイカー、エヴァンズ、ハンバーストンとデイヴィスといった論者は、発話に二次元的枠組みが与える二種類の内容を結び付けることで、それらの事例において単一の要素がアポステリオリかつ必然的/アプリアリかつ偶然的であるという事態は生じていない、と論じるのであった。この基本的な戦略を徹底したのがチャルマーズとジャクソンの認識的二次元主義である。彼らは、アプリアリ性はいかなる場面においても必然性に一致するというより野心的な主張を掲げ、この主張を擁護するために、二次元的枠組みの認識的解釈——特に、シナリオと呼ばれる認識的可能性と、判読可能性という主体の合理的な推論能力を用いた認識的内包の定義——を提案した。本稿では、この野心的な二次元主義に対する代表的な批判者として、ソームズとスタルネイカーを取り上げた。彼らは、認識的解釈に内在する問題点として、包括的記述説の困難や、様相・認識混合文の意味論における難点を指摘する。これに加えてさらに、アプリアリ性と必然性の再接続という認識的二次元主義の哲学的目的に対する批判がある。ソームズはクリプキ的事例に対する二次元的説明を一切認めない一方で、スタルネイカーはそのような説明に一定の有効性を認めているという違いはあるものの、彼らは両者とも、二次元的枠組みによるアプリアリ性と必然性の再接続には否定的である。そして最後に確認された

ように、これらの批判の根底にあるのは、世界の可能なあり方は現実世界がどのようなのかと切り離して語ることはできない、という点である。

今後の展望。チャルマーズ、ジャクソンらの認識的二次元主義が起爆剤となって、近年、二次元的意味論は大きな注目を集めている。そして、認識的二次元主義が成功裡な理論なのか、それがいかなる哲学的帰結をもつのか、という本稿で見た論争は、言語哲学のホットトピックの一つであり、現在進行形で活発な議論が交わされる未決着の問題である。しかし、二次元意味論に関する今後の議論の展開は、この認識的二次元主義の成否という論点だけに制限されるわけではないだろう。なぜなら、二次元的枠組みそのものはかなり中立的な道具立てであり、様々な解釈・応用を許すものだからだ。このことは、他ならぬ認識的二次元主義の提唱者であるチャルマーズ自身が、歴史上現れた種々の試みを抽象的な二次元的枠組の応用として整理した上で、その延長線上に、認識的解釈という自身の理論を二次元的枠組みの一つの解釈として明示的に提示したことで、明確になってきたことである。(例えばスタルネイカーは、1978年の段階では自身の理論をメタ意味論的解釈として明確に位置付けてはいなかった。彼が明示的にそのような解釈を提示するようになったのは、自身の試みとチャルマーズの試みとの比較検討を通じてである。) 実際、論文(1)や本稿で見たように、二次元的枠組みを、例えば指標詞の文脈依存性やメタ意味論的事象の説明といった目的のために用いることができるのであり、それらの試みの有効性は、認識的二次元主義の有効性とは独立に検討されるべきだと考えられるのである。そしてまた現在では、二次元的枠組みのさらなる応用として、二次元意味論を用いた指標的概念の説明、道徳的原理のアプリオリ性の擁護といった興味深い試みもなされている(Recanati, 2006, Peacocke, 2006)。このように、二次元的枠組みに対しては、非常に豊かで柔軟な概念装置として、今後も様々な解釈・応用がなされることが期待される。

註

* タイトルが示唆するように本稿は、本誌掲載の「二次元可能世界意味論の展開(1)——初期の二次元意味論——」および「二次元可能世界意味論の展開(2)——チャルマーズとジャクソンの認識的二次元主義」の続きである。これらの論文と本稿を含めた三本の論文で、二次元意味論の発展とそれにまつわる哲学的論争に関する一連のサーベイとなっている。それゆえ先の二つの論文をお読み頂いた上で、本稿に目を通して頂ければ幸いである。なお、前掲の二論文への言及はそれぞれ論文(1)、論文(2)という仕方で行うこととする。

(1) 例えば次。「W3を、海や湖を満たしている透明で飲むことのできる液体がXYZであるような「双子地球」シナリオだとして。もしW3が現実であるということが判明したならば、水はXYZであるということが判明するだろう。それゆえ、W3で評価された場合、「水」の一次内包はXYZを返す。また、もし[シナリオ]Aが現実であるということが判明するならば、水はH₂Oであると判明するだろう。それゆえAで評価された場合、「水」の内包はH₂Oを返す。(Chalmers, 2002, p. 146)」「[]内は現筆者)

(2) この場合、信念ないし理論全体の内容は、そこに現れる単称名と述語の現れをすべて変項で置き

換え、それらを束縛する存在量化によって表される。つまりそれはラムジー文に置き換えられる。

⁽³⁾ 整合的な信念の集合、整合的な理論に対しては、どのような可能世界においても、それを充足するモデルを与えることができる。しかし、いかなる可能世界においても真になるような理論はトリビアルであり、実質的な内容を欠くだろう（ルイスはこれを「パトナムのパラドクス」と呼ぶ）。それゆえ、包括的記述説が実質的なものとなるためには、解釈に一定の制約を課す必要がある。この問題に関してルイスは、二階の量化のドメインとなる性質と関係は、人工的ではない自然な性質と関係でなければならない、という制約を提案している。

⁽⁴⁾ それが真であるためには、デイヴィッド・ルイス＝デイヴィッド・ルイスである場合に、真であることをメアリーは信じていなければならない。しかし、デイヴィッド・ルイス＝デイヴィッド・ルイスが成り立つときでも、記述「ステファニー・ルイスの夫」を満たす人と記述「『反事実条件法』の著者」を満たす人が同一人物ではないということはある。

⁽⁵⁾ 例えばチャルマーズは次のような「隠された指標詞」説的見解を提案している。「XがSということを知っている」が真であるのは、当の主体が、「S」の二次内包をもち、かつ、適切な一次内包（どのような範囲の一次内包が適切かは文脈に依存する）をもつような信念をもつ場合かつその場合に限る。

文献

- Byrne, A. & Pryor, J. (2006). 'Bud Intentions', in Garcia-Carpintero & Macia (eds.) (2006), pp. 38-54.
- Chalmers, D. J. (2002). 'On Sense and Intension', *Philosophical Perspectives*, 16, 135-182.
- (2002a). 'The Components of Content', in *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Reading*.
- (2004). 'Epistemic Two-Dimensional Semantics', *Philosophical Studies*, 118, 153-226.
- (2006). 'The Foundation of Two-Dimensional Semantics', in Garcia-Carpintero & Macia (eds.) (2006) (pp. 55-140).
- (2006a). Two-Dimensional Semantics, in Lepore, E. & Smith, B. (eds.). (2006). *Oxford Handbook of the Philosophy of Language*, Oxford University Press.
- Evans, G. (1979). 'Reference and Contingency', *The Monist* 62:161-89.
- Garcia-Carpintero, M. & Macia, J. (eds.) (2006). *Two-Dimensional Semantics*, Oxford University Press.
- Kripke, S. A. (1980). *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (1985, 八木沢敬・野家啓一訳, 『名指しと必然性』, 産業図書)
- Lewis, D. (1984). 'Putnam's Paradox' in *The Australasian Journal of Philosophy*, 62, 221-236, reprinted in Lewis, D. (1999). *Papers in Metaphysics and Epistemology*, Cambridge University Press, pp. 56-77.
- Peacocke, C. (2006). 'Rationalism, Morality, and Two Dimensions', in Garcia-Carpintero, M. & Macia, J. (eds.) (2006). pp. 220-248.
- Recanati, F. (2006). 'Indexical Concepts and Compositionality', in Garcia-Carpintero, M. & Macia, J. (eds.) (2006). pp. 249-257.
- Soames, S. (2005). *Reference and Description: The Case against Two-Dimensionalism*, Princeton University Press.
- (2006). 'Kripke, the Necessary Apriori, and the Two-Dimensionalist Heresy', in Garcia-Carpintero & Macia (eds.) (2006), pp. 272-292.
- Stalnaker, R. C. (1978). 'Assertion', *Syntax and Semantics*, 9, 315-32.
- (2001). 'On Considering a Possible World as Actual', reprinted in Stalnaker(2003a), pp. 188-200.
- (2003). 'Conceptual Truth and Metaphysical Necessity', in Stalnaker(2003a), pp. 201-215.
- (2003a). *Way a World Might Be: Metaphysical and Anti-Metaphysical Essays*, Clarendon Press.
- (2004). 'Assertion Revisited: On the Interpretation of Two-Dimensional Modal Semantics', *Philosophical Studies*, 118, 299-322, reprinted in Garcia-Carpintero, M. & Macia, J. (eds.) (2006). pp. 293-309, (page numbers refer to latter).
- (2004a). 'Lewis on Intentionality', *Australasian Journal of Philosophy*, 82, No. 1, pp. 119-212.

〔京都大学大学院博士課程・哲学 / 日本学術振興会特別研究員〕